

# うお傳説

山崎哲戯曲集

漂流家族





うお傳説

山崎 哲

漂流家族

深夜叢書社

山 崎 哲 (やまざきてつ)

- 1946年 宮崎県に生まれる  
1970年 広島大学文学部国文科中退  
劇団「状況劇場」入団  
1971年 劇団「つんぼさじき」を主宰  
「紅孔雀」「由比正雪の乱」「白鳥の騎士」  
「新選組」「シェルブールの雨傘」「犬の町」  
「勝手にしやがれ」他29本を書き、列島を  
駆け巡る。'79年「つんぼさじき」解散  
1980年 劇団「転位・21」を結成  
ハードな舞台空間により、演劇界の新しい  
旗手として注目される  
1982年 「うお傳說」と「漂流家族」により第26回  
岸田國士戯曲賞受賞

山崎哲戯曲集 うお傳說／漂流家族

定価 2000円

昭和57年2月1日 第1刷発行

著 者 山崎 哲 ©1982年

装幀者 横尾龍彦

発行者 斎藤慎爾

印刷 欧文整版

製本 富士製本

製作 イフ・フォーラム

発行所 深夜叢書社

〒116 東京都杉並区阿佐谷北3-32-15

電話03(338)8542

営業所 〒162 新宿区早稲田 鶴巻町 205

千田ビル402 電話03(207)8064

////////////////////////////////////

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

山崎 哲戯曲集／目次

うお傳説——立教大助教授教え子殺人事件—— 5

漂流家族——「イエスの方舟」事件—— 141

装帧／横尾龍彦  
写真／菅沼清美  
滝本淳助

山崎

哲戯曲集

うお傳説／漂流家族



## うお傳説

——立教大助教教え子殺人事件——

登場人物

男

女

若い男

若い女

老人

医師

看護婦

ある解放病棟の午まえ……、患者たちが中庭にたむろしている。草をむしっている老人、穴のなかに身を埋くめてぼんやり空をみあげている若い男、白い下着を干している男、芝生に坐って週刊誌に目をおしている看護婦、それから、小さな用水池のまわりをゆっくり歩いている医師……。かれらは、そこにいる。たださりげなくいる……。否、かれらは頗る必死にさりげなくいようとしているのである。廊下の向こうから、オルガンが流れている。その音に誘われるかのように、女がフラリはいってくる……。

看護婦　こんにちわ、芹サン。

老人　こんにちわ、芹サン。

女　……。 (ベンチに坐って赤い毛糸を編みはじめる)

医師　さあ、みなさん、大きく胸をはって新鮮な空気をたっぷり頂きましょう。

老人　みなさん……？

医師　忘れるんです、堀口サン。なにもかも忘れて、あちらでツンツン草をむしりましょう。

若い男　先生……。

医師　忘れるんですよ、殖生クン。なにもかも忘れて、淋しい金魚のようにお口パクパクしましょうね。(女に) そう……。数えるんです、芹サン。毛糸の編みメだけを一生懸命数えなさい。そうすれば忘れることができます。なにもかも忘れてあれです……。私たちはまるでここにはいないかのようにふる舞うことができますよ。八城クン……!?

看護婦（見る）……。

医師 は、そこに坐っている……。はい、いいですね、みなさん。うん……。いい、なかなかいいいなあ。それで、私はちよいと町の八百屋さんへ……。いいなあ。ホントにいい、なんていいお天気なんだろう。ええ、いいですよ、みなさん。とても素敵ですよ……。

と、立ち去る。男、空っぽの洗濯籠を手に女のうしろ姿を見つめていたが、そつと震えて……、

男 ここにいるよ、あや……。ぼくはここににいるからね……。

なにかから逃れでもするように用水池のそばへ行き、洗濯をはじめた。便りを読むかのように……、

男 大っきいサンゴ、小っちゃいカンナ……。お天気ですか？　とうさんたちも元気です。南の島の暮らしにはもう馴れましたか。島の空気はあれだから、葛飾区のごはんよりもおいしいでしょうね。おいしいということはなにはともあれうれしいことですね。ところで……。

女（かすかに）あなた……。

男 ここだよ、アヤ……。〈再び〉月日がすべるのは本当にはやいものです。あの日……。お船がはなれる竹芝桟橋ではカラッ風が目染みて、デッキに縋りつくおまえたちの姿が涙の淵でふくらむシャボン玉のように見えたのに、いまはもう首筋に汗がねちねち……。風さえも木の枝でダラリ

ンコウだっている、そんな季節になりました。指折り数えてみたらば、とうさんはこの病院で181枚の日付けカレンダーひっちゃぶき、181枚の一日を食べちゃいました。この比喩……、わかりますか？ それはね、かあさんとここで過ぐす一日いちにちを、とても大切にしているということなのです。一日いちにちを大切にすると、つまり、戦うということなのです。ええ、とうさんはいま戦っています。戦いにトライしています。してますよ、ホント……、してんだから……。(洗濯物をぎゅっと絞って、物干竿にかける) ええ……、こうやって臉を閉じれば、四つ木の生なましい家庭のジジョウがいまも甦ってきます。爪に弾けた障子……、畳にひっくり返ったインキ壺……、台所の暗がりで新芽をふいているタマネギ……、そこだけはいつも小ぢんまりとまとまったタマのお墓。そうして……、男の子のくせに、赤いスカート穿いて台所と四帖半を疾駆するサンゴ。とうさんの意見を見無視して、歯ブラシでひたすら虫歯を横磨きするカンナ……。耳にこびりついて離れません、そうやっていつもおまえたちがうたった、抵抗の唄……。

子供たちの声が聴えてくる……、

男 声 家庭！ ジジョウハヤメロ……、家庭ノジジョウハ飛ンデユケ……、家庭ノジジョウハ……！  
ありがとう、サンゴ。ありがとう、カンナ。とうさんは戦います、きつと立派に戦いぬいてみせます。だから……、いまは淋しい想いをさせてすまないが、おばあちゃんの脛かじって早すぎる人生の苦難を忍んでください。もうじきです。ええ、かあさんも良いのです。ぼちぼち快方に向

っているのです。親子四人そろって、じきにまた四つ木のお家に帰れるでしょう。いいえ、帰れます、帰れますとも！ そうしたらば……、大っきいサンゴに小っちゃいカンナ、日曜日にはのり巻き弁当こしらえて堀切のショウブ園みにゆこうね。お隣りの金子サンちに負けない家庭のダシラン、しようよ！

いささか照れくさくなったのだろう、竹竿で乱暴に池をひつかきまわす……、と、竿のさきに白いハイヒールが一個釣れる。

男 ……？

女 あなた……。

男 え……。

女 あなた。

男 ぼくか。

女 あなたです。

男 なんだろう……。

女 なんですか。

男 なにが？

女 なにがじゃありません。

男 あ……、ごめんごめん。水が跳ねたんだね、謝まるよ、うん。気をつけよう。そうだな、今度か

ら気をつけてそっと静かにやります。しかし、あれだね……、誰がこうもいろんなものを投げこむんだらうね、三日前に底ざらえしたばかりなのに。ホラ、この白い靴なんかまだ充分履けるよ。誰だらう、もったいない……。 (一度捨てて、また慌てて拾う)

女 あなた。

男 ……。

女 なにをしているんです。

男 この靴に見覚えがないかい。どうもあれだな……、どこかで見たような気がするんだが……、おまえのか？

女 違います。

男 誰が履いていたのかなあ……。

女 そんな靴はどうだっていいんです。

男 うん……。

女 女の靴にこだわっているとあれですよ、いまに家庭のジジョウが始まってしまいますよ。そうしたら、あたし責任もちかねます。

男 いま行きます、飛んでいきます、えい！ (と、竹竿で池を跳びこえる)

女 ……。

男 (自分で驚いている) お……、おい、見たか。

女　なんです。

男　見たろ？

女　なにも見ません。

男　ぼくはいまこの池を跳びこしたよ。それもあれだ……、ヒラリ蝶々のように。できるもんだね、考えなければ。どうだい、もう一度跳んでみせようか。

女　……。　（手の動きがとまる）

男　おい……。　どうしたんだい。

女　あたし情けなくて、なんだか泣けます。

男　あれか、ぼくが池を跳びこすのは嫌か。

女　そうじゃありません。　（手が動きはじめる）

男　そうか……。　いや、わかつてる。きつとあれだろ……。　ぼくはみっともなかったんだ、その……。　水溜りを跳ぶガマガエルみたいにみっともなかった、とてもみっともなかった。ただ、なんと言  
うか……。　あの池を軽がると跳んでみせればおまえが喜ぶんじゃないか、ぼくはそう思ったんだ  
けど……。　重たかった、すまなかった。うん、もうよしよ。無様はもうよしします。　（ぼそっと）  
自信あったのに……。

女　あなた……。

男　ここにいろよ。

女　いったい幾つになったのです。

男　なんだ、藪から棒に、はは……。

女　まじめに訊いているんです。

男　そうだな、30……。

女　38歳にもおなりになって、あれはなんですか。

男　だからもうすよ。子供みたいに池を跳びこしたりはしません。

女　いいえ。38歳にもおなりになってニヤニヤするのはおやめ下さい……。あたしはそう頼んでいるのです。

男　ぼくがニヤニヤをしていたって!?

女　していました。

男　いつ?

女　さっきです、あそこに立って。

男　そうかな。

女　そうです。

男　あれはニコニコのつもりだったのに……。

女　いいえ、ニヤニヤです。間違ありません。いいですか、ニコニコというのはこうです……。 (無表情な微笑である) でも、あなたのは……。 (まったく同じ微笑) これがニコニコでしょうか。

男　さあ……。

女　さあ、はいいいんです。もっとよくごらんになって、目尻の下品な感情を鋭くよみとって欲しいの。

（また笑ってみせる）……。さあ、これのいったいどこがニコニコと言えるんでしょう。

男 よかないんですつ。

女 坐ってもいいか？

男 いいえ、背筋をたててお聞きになって下さい。

女 ……。（不安になっている）

男 いいですか。気違いはあたしであつて、あなたではないのです。気違いでもないあなたがです、女学生の手のひらに乗ったコンニャクみたいにヤニ下つてです、ぶつぶつ仏前でお経をあげるかのようにひとり呟いていてごらん下さい。事情を知らない人は……、あそこの旦那さま、ちよいとおかしいんじゃないやしません？ あら、奥さまもそうお思ひになって？ そりやもう……。ええ、きつとネジ切れているんじゃないやございませんこと、お脳が？ まあ、奥さまったら、おホホホ……、（手の動きが乱れている）世間では誰だつてそう噂します。噂をもとめて目を光らせているのが世間というものなんです。あたし、そんなの嫌！ ……、（うつすら涙が滲んでいる）嫌です……。気違いはあたしひとりでたくさん、ほんとうにたくさんですからね。それでしよ

男 はい。

女 あなたはあたしの付添人なんです。あたしはあなたしか頼るものとがないんです。いまさら故郷の島へ帰るわけにもまいりません。そんなふうにあたしは可哀想なんですから、もうすこししか